

# 淡路市の山間部で生活する百寿者・主介護者と地域の相互作用

Interactions between centenarians and their primary caregivers living in a mountainous community in Awaji City

原田美穂子<sup>1)</sup>, 田中マキ子<sup>2)</sup>, 長坂祐二<sup>2)</sup>, 田中耕太郎<sup>2)</sup>  
Mihoko Harada, Makiko Tanaka, Yuji Nagasaka, Kotaro Tanaka

## Abstract

The purpose of the study was twofold. One was to clarify how the local culture and the spirit of mutual assistance were rooted in a mountainous community of Awaji City in relation to caring for centenarians. The other was to examine how these elements were seen by centenarians and their primary caregivers. As a result, it was found that the life in this mountain community was managed by the local autonomous body and that primary caregivers held a strong sense that they “must not cause trouble” to others when providing care although they held a view that the community bond was very strong. Based on this, care-giving was seen as family matters, separate from community issues. Thus, in terms of meeting care-giving needs, they made an active use of the public care insurance service instead of relying on the community. At the same time, daily life of caring for centenarians enjoyed moral support by community residents’ words of encouragement, which resulted in their positive attitude towards care-giving. It was thus made clear that the life of caring for centenarians produced a sense of satisfaction to the primary caregivers.

## 要約

百寿者を介護する際、淡路市の山間部の土地の文化や地域のコミュニティの助け合い精神が、どのように地域に根付いているのか、また百寿者とその主介護者にどのように認識されているのかについて明らかにするため、百寿者と主介護者を対象にインタビューを行った。その結果、淡路市の山間部は、住民自治によって生活が営まれており、主介護者は地域の絆について強いと思っているにも関わらず、介護に対しては「迷惑をかけてはいけない」という思いが強かった。このことから介護などの不自由さは、地域の力に頼らず公的介護保険サービスを積極的に活用していた。また百寿者を介護する生活は地域住民から声を掛けられることによって情緒的な励ましを受けており、介護に対するポジティブな姿勢を生んでいた。百寿者を介護する生活は、主介護者に満足感を与えていたことが明らかとなった。

Key words : centenarian, primary caregiver, community support, mountainous area

Key words : 百寿者、主介護者、コミュニティの力、山間部

## はじめに

日本の人口推計は、近年の出生率低下や寿命の伸びを反映して、少子高齢化が一層進行し、本格的な人口減少社会になることが予測されている<sup>1)</sup>。少子高齢化社会の加速が止まらない我が国において、高齢者が在宅で、健康で、よりよく生きることは、誰にとっても

理想的であり、と同時に深刻な課題でもある。

百歳高齢者を対象とする先行研究には、QOLと身体活動との関係<sup>2)</sup>、QOLと生活習慣<sup>3)</sup>、QOLと健康意識との関係<sup>4)</sup>などがある。また長寿の要因を検討し明らかにした研究<sup>5)</sup>では、高齢者には基本的日常生活能力やコミュニケーション能力、認知能力との関連

<sup>1)</sup> 山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士後期課程

<sup>2)</sup> 山口県立大学大学院健康福祉学研究科

性の強いADLが必要であり、それらの能力が不十分である場合には、家族や社会からの支援があることが、在宅で生活を続けられるかどうかの鍵となることが示唆されている。さらに家族に十分な介護能力があることや、介護力が不十分な場合には、住宅支援サービスによって補完されている状態であること。また十分な介護力は、副介護者を確保できる家族構成や介護者の意識から生まれていると推測している。そして、その基盤となっているのは、その土地の文化や地域のコミュニティの力が影響していると考えられている。

兵庫県淡路島において、地域のコミュニティ力が注目されたのは、奇しくも1995年に起きた阪神淡路大震災であるが、その救助活動は高く評価されている。「救いは、誰がどこの部屋に寝ているのか、住民が互いに知っていたことだった<sup>6)</sup>。」「『どこに誰が埋まっているか、今町内で誰がいないか』とすぐに把握できた。それは『誰々はいつもここで寝ている』とか『この時間はこの辺にいるから埋まっているのではないか』という細かい情報が住民から入ってきたからだ。消防で把握しようとする、すぐ町内会長などが『今この家におばあさんが埋まっている』などすぐ教えてくれた。それが淡路ではがれきの中から早く救えた要因だった<sup>7)</sup>。」このように淡路島において震災後の救護活動がスムーズに進んだのは、近隣住民との普段からのコミュニケーションが良く取れていたことが特徴づけられている。また、仮設住居に移住した際には、村単位で移動したため、震災前の「ご近所づきあい」が続いていた。「元々のご近所さん同士でまとまって、仮設住宅に引っ越しているの、何十年と続いているコミュニティが守られている<sup>8)</sup>」ことから、被災して家を離れても、「ご近所づきあい」が高齢者を含め、人々の支えになっていたと考えられている。

淡路島の森林面積は、島の総面積の51.7%を占める。島は淡路市、洲本市、南あわじ市の3市から構成されているが、いずれの市においても山間部と海浜部の地区を併せ持ち、高齢化率は上昇の一途をたどっていることが、島全体の地域福祉において課題となっている。

淡路市の総人口においても減少傾向が続いており、昭和40年代には6万人を超えていたが、平成17年には5万人を割っている。世帯数は、緩やかな増加が続いていたが、平成12年から平成17年にかけては減少に転じている。平均世帯人数は一貫して減少が続いており、核家族化が進行している。また年齢3区分別人口の割合の推移は、0～14歳、15～64歳人口の割合が減少する一方で、65歳以上人口が兵庫県、国を大きく上回っ

ている。また高齢化率も急速に増加しており、平成17年には29.5%と3割近くまで上昇している。高齢者世帯数は、全体では増加傾向にあり、平成12年以降は、淡路市の総世帯の半数を超えている。世帯分類別では、平成7年以降、高齢者同居世帯は減少傾向にある一方で、高齢者夫婦世帯、高齢者単独世帯は、世帯数、割合ともに増加している状況である。こうした状況の中、平成24年現在、百歳長寿者は37人が生活している。

これまでに行われた淡路島の百歳高齢者の生活実態を調査した研究<sup>9)</sup>では、次のようなことが明らかになっている。病気をもち、病気と上手く付き合いながら生活を送っていること、ADLの自立、特に排泄の自立が自宅生活を可能にする要因であること、男性が女性よりもADLが高い傾向にあること、歯牙および視力の確保は生活するうえで重要な条件であること、姿勢機能・移動機能・作業機能が連動した行動に難しさを感じていることなどである。しかし、こうした条件がそろっていることを前提にしていながらも、山間部面積が島の半数を超えるという地域特性を持つ淡路島において、山間部に住む百歳高齢者がどのように地域と結びついているかという研究はなされていない。

## I. 研究目的

百歳長寿者を介護する際、淡路島の山間部の土地の文化や地域のコミュニティの助け合い精神が、共同体的意識となって地域に根付いているのか、またその地域で生きる百歳長寿者とその主介護者にどのように浸透しているのかについて明らかにする。

## II. 倫理的配慮

研究を行うにあたり、山口県立大学倫理委員会の承認を得た。調査対象者には、研究の主旨・倫理的配慮を記した書類を準備し、説明を行ったうえで同意を得ている。

## III. 研究方法

### 1. インタビューの方法

半構造化インタビューを2回行った。インタビューの1回目は百歳長寿者であるAさんと、主介護者であるBさんの2名である。1回目は、表1、2に示すように、半構造的にまとめられた内容をインタビューガイドに沿って、それぞれにインタビューを行った。13時ごろ自宅を訪問すると、Aさんは台所から丸椅子を利用して、歩いて客間に出てこられた。Aさんは丸椅子を傍らに置き、自分で座椅子に座られた。お嫁さん

であるBさんは、座卓を挟んでAさんの左隣に座り、研究者はAさんの右隣に、ちょうどAさんを囲む形に座った。Aさんにとって、ちょうど遅い昼食に当たる時刻であったため、蒸かし芋の皮やヤクルトのラベルを自分で取り除き、食べていた。約60分のインタビューを行った。

2回目のインタビューは、主介護者のBさんに行った。内容は主に、山間部の生活について話してもらった。Aさんはデイサービスを受けている時間であったため、不在であった。約60分のインタビューを行った。

表1 百歳高齢者に対するインタビューガイド

<p><b>【地域性】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 淡路島の地域の絆について、強いと思われませんか？</li> <li>2. 地域の行事の参加状況はどうですか？</li> </ol> <p><b>【地域の中での介護について】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ご家族の中で、百歳であるご自身がいることについて、どのように思われますか？</li> <li>2. ご家族の人とかかわる中で、何が楽しみですか？</li> <li>3. 百歳の秘訣は何ですか？</li> <li>4. 食べること、動くこと、好きなことを続けることで、健康の秘訣は何ですか？</li> </ol> <p><b>【家族の中での介護について】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. この地域の中で、百歳であるご自身がいることについて、どのように思われますか？</li> <li>2. この地域の人とかかわる中で、何が楽しみですか？</li> </ol>
---

表2 主介護者に対するインタビューガイド

<p><b>【地域性】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 淡路島の地域の絆について、強いと思われませんか？</li> <li>2. 地域の行事の参加状況はどうですか？</li> </ol> <p><b>【地域の中での介護について】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 百歳高齢者をこの地域で介護することに、どんな気遣いがありますか？</li> <li>2. 百歳高齢者をこの地域で介護する時、周囲の助け合いの中で、どんなことが助かっていますか？</li> <li>3. 百歳高齢者をこの地域で介護する時、頼めることと頼めないことはありますか？それはなぜですか？</li> <li>4. 百歳高齢者を介護していて、どのような状況になるとこの地域では介護できないと思いますか？</li> </ol>
--

## 2. 分析の方法

質的事例研究は、データから、個人の経験や出来事、問題といった事例の固有な意味を解釈していく。しかし質的研究の分析方法は研究者によってさまざまであり、典型的な方法はないとされている。多くの質的研究の分析方法に共通しているのは、記載したデータを繰り返し読み、コード化、カテゴリー化後にテーマを抽出する、現象を説明するため抽象化のプロセスを行うのである。そこで、本研究における分析は、質的研究手法に基づく、抽象化のプロセスを採用した。

## IV. 結果

### 1. 百寿者の生活歴

対象は、平成24年11月26日現在102歳の百寿者Aさん（女性）である。Aさんは明治42年に出生し、淡路島で育った。その後山間部に嫁ぎ、5女1男をもうけた。夫と共に農業を営み、村落の住民と協力して田畑を手伝いながら生活を送ってきた。家族構成は、Aさんと夫、息子夫婦、孫の5人暮らしであった。90歳に近いころ、夫を病気で亡くした。夫は95歳であった。

孫が大学を卒業し、結婚して淡路島を離れてからは、4人暮らしとなった。

身体機能：徐々に低下していったが、自宅で生活することは可能である。表3に日常生活動作能力を表すバーセルインデックスの結果を示す。合計得点が40以下の場合、かなりの介助を要する状況と判断されるが、Aさんは55点であり、日常生活動作能力を維持していることがわかる。Aさんは88歳で大腸がんを患ったが、本人の希望で手術を受けている。白内障も患っていたが、両眼とも手術を受けている。月に2回、かかりつけ医が往診にき、体調管理を行っている。聴覚機能は低下しており、日常会話は耳元でゆっくり話すことと聞こえる。聴覚機能の低下に対して、相手の口元を見たり、話の文脈から読み取ることで補い、会話に参加することができる。また5、6年会っていない人や、孫やその配偶者など血縁が遠い関係でも、その人の名前を正確に覚えており、親戚や村落の集まりで家に人が来ても、誰が来ていないか言い当てることことができる。

日中の生活：デイサービスを受けない日は、主介護者が起床後、オムツ交換が行われ、10時ごろまで布団で休んでいる。その後、リビングまで歩行して移動し、

表3 バーセルインデックス（Barthel Index；機能的評価）

1 食事	10	茶碗からこぼすこともあるが、他の家族と同じものを食べ、標準時間内に食べ終えることができる。
2 車いすからベッドへの移動	10	付き添いが必要だが、軽度の部分介助で可能である。
3 整容	0	部分介助が必要である。
4 トイレ動作	5	オムツを着用しているが、排便の時はトイレに自ら行くことができる。就寝後は、トイレは使用しない。主介護者が就寝するまでに3回、起床後に1回、オムツを交換している。
5 入浴	0	ヘルパーによって週に1度、入浴している。全介助だが、湯の温度調節など配慮することができる。
6 歩行	15	家の中では、丸椅子を使いながら歩行することができる。車いすもおいであるが、特別な事情がなければ使用していない。
7 階段昇降	0	
8 着替え	5	半分以上は自分で行える。
9 排便コントロール	5	主介護者が食事に留意しており、コントロール良好である。
10 排尿コントロール	5	夜間は、オムツ着用しているがポータブルトイレに移動しようと、オムツを脱ごうとして、周囲を汚してしまうこともある。その後は自分で処理をすることが不可能で、主介護者の手伝いを要する。
合計	55点	

朝食兼昼食を食べる。テレビを見て過ごし、14時ごろ蒸かしイモとヤクルトを食べる。午後からヘルパーが来て、入浴などのサービスを受けている。夕食は17時ごろ食べる。就寝は18時ごろである。主介護者に用事があって家を空けるときは、テレビを見ながら2～3時間、待っていることができる。

介護保険サービスの利用状況：6年前より介護保険サービスを利用し始めた。2年前よりショートステイを利用している。Aさんは週に一回、デイサービスを利用して、淡路島の行事などに参加している。デイサービスでは、塗り絵などうまく行うことができる。初めて参加する利用者に、道案内をすることができる。“食事を残すと失礼に当たる”“人前でお金の話はしない”などの作法に優れた配慮ができる。このようなことからAさんは、それらのサービスを受けることを楽しみにしている。

## 2. 主介護者の生活歴

対象は、平成24年11月26日現在72歳の主介護者Bさん(女性)である。昭和15年淡路島の海浜部で出生し、山間部に嫁いだ。育児と農業を営みながら、昭和38年に開業したゴルフ場でキャリーの仕事を33年間勤めた。その後両膝関節変形症を患い、両足を手術している。その後12年間に渡り、Aさんを介護している。詩吟、民謡、ちぎり絵など多くの趣味を持ち、友人も多い。交通手段は単車(バイク)を使っている。

## 3. 百寿者と主介護者の住む山間部の生活

この地域の山間部は海拔200mほどである。幹線道路が設備され、住宅が建ち並び、商店や教育機関、医療施設などの立地が充実し、利便性が高い海浜部とは違い、山間部は、広大な面積に、外套のない細く整備されていない山道が主な交通道路となっている。そのため海浜部と山間部を結ぶ交通のネットワークや移動の手段が限られている。少子高齢化が進み、近年小学校は次々と廃校になった。

この地域の山間部は住民自治が残っており、隣近所の人々や家々で支え合う隣保や、その隣保が行う常会などによって地域福祉が営まれている。近隣では、7軒の家が隣保として付き合いをしている。お葬式などがあれば参加し、手伝う。常会では、近所のお付き合いをしたり、世間話をしたり、役場の仕事を交代で持ち回り、代行している。このような付き合いは、山間部の風習として古来より根付いている。

## 4. 百寿者へのインタビュー

### 1) 百歳になった時の気持ちについて

百寿者：「なーんとも思わへん。」

### 2) 日々の楽しみ

インタビュアー：「毎日何が楽しみですか？」

百寿者：「何にも楽しみっていうことはない。動ける間、動くだけのこと。」

インタビュアー：「食べることは、どうですか？」

百寿者：「おいしいです。」

### 3) 健康の秘訣

主介護者：「おばあちゃん、あのな、どないして長生きしてきよったんかって。」

百寿者：「そんなんわからん。どないもあらへんやん。おんなじ日々の、できる仕事して、あの、暮らしてきたんやん。なんにも、秘訣もなんにもないよ。」

インタビュアー：「食べ物は何？食べるものはどうですか？」

百寿者：「私やそんなこと知らん。」

主介護者：「食べるものよ。」

百寿者：「食べる物は、みんなと一緒やないの。な。秘訣やこと言うたって、そんなややこしいこと知らん。」

## 5. 主介護者へのインタビュー

### 1) 淡路島の地域性

淡路島の地域性について、インタビューを行った結果、カテゴリー化し要約した内容を表4に示す。

### 2) 地域の中での介護について

地域の中での介護について、インタビューを行った結果、カテゴリー化し要約した内容を表5に示す。

### 3) 主介護者の百寿者介護に対する思いと介護を支えるもの

主介護者が認識する百寿者介護に対する思いと介護を支えるものについてインタビューを行った結果、カテゴリー化し要約した内容を表6に示す。

### 4) 家族の協力

主介護者が認識する家族の協力についてインタビューを行った結果、カテゴリー化し要約した内容を表7に示す。

表4 主介護者が認識している淡路島の地域性と行事への参加

カテゴリー	要約
淡路島の地域の絆の強さ	結構強いと思っている。
隣保について	親戚関係ではない、隣保が7軒ある。拝みに行ったり、お葬式などがあれば参加する。そのようなお付き合いは、淡路島の風習である。この隣保によって、人との出会いの機会は多くなる。寄り集まると、食事をしたり、雑談して、夜の11時ごろに解散する。そのような近所の人付き合いは、いいものだと思われている。
常会について	常会といって、近所のお付き合いしたり、世間話をしたり、役場の仕事を交代で代行したりする。この地域には24軒から25軒ある。人と人の交わりを大事にしている。介護者は先日救急車で病院に運ばれているが、その話を聞きつけて、見舞いに訪れたり、している。もののやり取りでは、珍しいものがあつたり、旅行の土産を交換して付き合っている。
淡路島の良いところ	人付き合いがあつたかいいところは、町よりも田舎の方がいいと思っている。
阪神淡路大震災のときの、地域力について	地域の力はあつたと思う。話の内容は、家の被害状況にとどまる。
近所の高齢者との付き合い	近所には99歳のおじさんが住んでおられる。あまり交流はない。親戚関係ではない隣の人と、昔の親戚関係にある人が近くに住まわれている。介護者の健康を案じる会話がなされる付き合いである。
淡路島の行事への参加	百寿者はデイサービスを利用して、淡路島の行事に参加している。主介護者も友人が多いので、友人と行事に参加したり、趣味に費やす時間を楽しみにしている。

表5 主介護者が認識している地域の中での介護の思いと介護保険サービスの利用状況

カテゴリー	要約
百歳高齢者をこの地域で介護することの、気遣い(近所の人とのかわり)	関係がこじれるということはない。それぞれが辛抱している。喧嘩はご法度。いややと思っても口には出さないようにして、関係を保っている。しかし田舎は便利が悪いけれど、人付き合いを大切にしている生活がいいという。
百歳高齢者をこの地域で介護する時、周囲の助け合いの中でどんなことが助かっているか	地域の人と介護をしているのではない。主介護者が介護保険サービスを利用して介護をしている。そのようなサービスがない時代はどうしていたのか、わからない。
この地区で介護をするとき、助かっていること	助かっていることは何にもない。ただ「大変だな」という優しい気心を持った声を掛けてくれることが励みになっている。地域から認めてもらっていることが助かっている。
地域の中で介護する時に、頼めること、頼めないこと	忙しいときに、「おばあちゃん見てて」というのは言いにくい。そういうときは、まず親戚に頼み、まさかの時はデイサービスやショートステイを利用する。近所の人に迷惑をかけるのは、困る。お礼を考えなくてはならなくなる。地域との関係を壊すことは考えられない。
百歳高齢者を介護していて、どのような状況になるとこの地域では介護できないと思うか。	家から5分ほどのところに、夫の兄弟が住んでいる。夫の兄弟は84歳であるため、もし、夫がその年齢ならば、主介護者も高齢者となるため、その年齢であれば、介護は無理だという。
カテゴリー	要約
介護保険サービスの利用状況	主介護者の用事があるときに利用している。利用方法は、事前に介護保険施設の予定を把握しておき、予約しておく。予約出来なければ、主介護者の動きが取れなくなってしまう。
介護保険サービスの利用回数	デイサービスは1回/週、ショートステイは、主介護者の予定があるときに二泊三日で利用する。主介護者は、そのバランスをうまく活用していると満足している。施設にずっと入居させておくと、足も弱くなっていくため、世話をする人の苦労がかさむことになってしまうことを予測して、家で自分の力で生活することが、介護者にとってリハビリであると信じている。
かかりつけ医との関係	月に2回、かかりつけ医が往診に来る。血圧、脈拍などを診ておられる。家にあがって、広間にごろんと寝転がるなど、関係性が良いことがわかる。主介護者は、何かあった時の相談窓口にかかりつけ医がいることに安心を感じている。

## V. 考察

本事例を詳細に分析していくなかで、山間部に住む人たちが生活するうえで必要とする、住民自治の力と家の結びつきの在りようが、次第に明確になってきた。そこで、島の山間部に住む百寿者と主介護者が、どのような地域のコミュニティの中で生活を送っているのかについて考察する。

### 1. 山間部の地域性と相互扶助活動

現代の地域福祉が抱える問題は、少子高齢化や地域のつながりの希薄などが挙げられる。今回対象とした

淡路市の山間部では、住民自治が今もなお生活に定着しており、人々は地域とのつながりを密にしており、独特な文化を有していた。もともと地域福祉の歴史的基盤になるのは、前近代から続く共同体における相互扶助活動であった。このような活動は、幕藩体制期にまで遡ったところに起源がある。それは「五人組制度が確立され、地域末端組織として相互の労働・扶助・監視の役割を担ったが、この組織は近代以降も地域の基盤として残り、家制度と並んで村落での地域生活を支える実質的な機能を持った<sup>10)</sup>」ことに示されている。しかしながら共同体における相互扶助活動は「地

表6 主介護者が認識している百寿者介護に対する思いと介護を支えるもの

カテゴリー	要約
百歳高齢者に対する主介護者の思い	100歳の介護者を介護するとは、家族として当然と思っている。施設に預ける人のほうが多いが、しかし、家で、好きなようにさせてあげたいと思っている。
主介護者の役割意識	面倒を見るのは当たり前。親をいたわっていく気持ちを持つ。
手塩にかける	主介護者は定年退職してから12年介護生活を送っている。「手塩にかけて」介護をしてきた。72歳の主介護者は自分の年齢を気にしている。

カテゴリー	要約
主介護者の支え ・祖母としての役割認識	主介護者の孫が、主介護者が介護者をきちんと世話していることを、みている。孫が主介護者を認めていることが、主介護者にも伝わり、孫に対しても教育的に関わっているという自信につながっている。
・主介護者の表彰	民政委員による申請で、積善会が主介護者を表彰した。主介護者はこれまでの功績を認められ、表彰状を受けた。

カテゴリー	要約
介護をする上での修養	たまには汚してしまうこともあるが、それは腹を立てるのではなく、無視することが大事だと思っている。
介護をする上での修養	無視ができるというのも、修養の一つと考えている。ごはんをこぼして食べる主介護者に対しても、こぼすものだと思って、みて見ぬふりをするのが大事だと思っている。
介護をする上での修養	怒っても、仕方がないと思っている。開き直りが大切だと思っている。

表7 主介護者が認識する家族の協力

カテゴリー	要約
家族の協力	夫は、協力的ではない。夜中に介護者が布団の中から呼んでも、夫は見に行くことはない。そのような状況で、姑の立場をとる主介護者と、夫との間で喧嘩になることは頻回にある。
夫の介護に対する姿勢	夫は介護するに当たって、介護者に対して、ひとつひとつ口をはさむ。

方自治・地方分権化・住民参加との関係、町内会・自治会機能や住民の自発的・主体的活動との関係で、地域福祉の展開に影響を与えている<sup>11)</sup>。」ものであり、戦後、「都市化、産業化、核家族化、高齢化など社会構造と生活構造の変化に伴う共同体的生活様式の弱体化、地域や家族の問題解決機能の低下、新たな問題の形成、住民の諸活動の発展などによって、人々のニーズが国民全体の生活問題へと変貌し、国家政策としての対応が本格化し、人々の権利として普遍化していった<sup>12)</sup>。」ことに表されるように、時代の変遷に伴って様相を変えていったことがわかる。ところが人口の少ない山間部では、近隣住民と協力しながら生活を支えざるを得ない環境を持つため、共同体における相互扶助活動が昔と変わらぬ形で残っているのである。そのような付き合いを、主介護者は表4の中で「淡路島の風習」だと認識しており、隣保の集まりや常会があること、またこうした近所の付き合いがあることを「良いものだ」と語っている。これらのことから、古来より続いてきた共同体による相互扶助活動は、今も尚、住民に浸透しており、暮らしの上で大変役に立っていると認識されていた。

## 2. 地相互扶助活動の中の介護の認識

このように山間部では、同じ集落の人々が協力して田植えをし、水を利用し、収穫を手伝うということは欠かせないことであり、困ったことは、近隣に住む人との助け合いによって充足されてきた。これは非常時に限らず、日常を含めた近隣住民との関係性である。地域のつながりが果たす役割には、①地域における教育、②子育て支援、③防犯・治安、④防災、⑤高齢者福祉が含まれている<sup>13)</sup>。1995年に起きた阪神淡路大震災時に発揮された地域力は、非常時のケースであったとしても、日常の付き合いから功を奏している。では介護などの問題は、どのように認識されているのだろうか。

淡路市は海浜部と山間部に分かれ、海浜部は人口が集中している一方で転入者が多く、地域の関係性が作りづらいという課題を抱えている。山間部は、高齢化と共に一人暮らしが増加し、買い物などに不便を感じているのみならず、田畑や集落の維持についても大きな課題となっている。また少子高齢化も着実に進んでいるが、山間部の生活様式も見えづらいという状況がある<sup>14)</sup>。このような対比から見えてくる地域福祉の課題は、海浜部では住民自治のシステムが弱くなってきていること、山間部では住民自治のシステムは残っているが、利便性が極端に悪くなっていることがあげら

れている。内閣府は地域のつながりを、そのきっかけに着目して次の3つに分けて考察している。①近隣関係によるつながり、②エリア型地域活動によるつながり、③テーマ型地域活動によるつながり、である。近隣関係によるつながりとは、ある場所に居住し生活することで生まれるつながりのことである。エリア型地域活動によるつながりとは、地域の地縁組織に参加することによって生まれるつながりであり、典型的な地縁組織として町内会・自治会がある。これは本人の自主性に任されている。テーマ型地域活動によるつながりとは、特定の目的を果たすために設立された組織に参加することによって生まれるつながりであり、ボランティア団体やNPOなどがその典型的な組織である。これらを淡路市の海浜部と山間部の特性に照らし合わせると、海浜部は「近隣関係によるつながり」が最も強く、次いで「テーマ型地域活動によるつながり」、「エリア型地域活動によるつながり」という構造が考えられる。また山間部は「エリア型地域活動によるつながり」が最も強く、次いで「近隣関係によるつながり」、「テーマ型地域活動によるつながり」という構造が浮かび上がる。また住民自治の状況変化から、地域社会の類型は次の3つにあらわされる<sup>15)</sup>。①地域型コミュニティ（ゾーン型）、②課題型コミュニティ（テーマ型）、③仮想型コミュニティ（バーチャル型）、である。地域型コミュニティとは、村社会モデル・ガバメントモデルといわれ、自治会（町内会）を基盤とした地縁組織で、従来の自治モデルである。隣保、婦人会や老人クラブなど住んでいる「土地」を中心に形成される。顔が見える関係のため、お互いの尊重を促すが、一方で意見が言い辛く、多数派・少数派の関係になりやすく社会的排除を起こしやすいという側面を持っている。課題型コミュニティは、ローカルガバメントモデルといわれ、生活上の課題や自らの興味を持つものたちが集まって組織形成される「知縁組織」である。ボランティア活動者やNPO、当事者グループなど数も多種多様である。課題を中心に集まるため、発言がしやすく活動的であるが、メンバーが固定化されるため新たにメンバーに入ることが難しい場合もある。また圧力団体として見られたりすることも多いので周辺とのトラブルが起きることもある側面を持っている。仮想型コミュニティは、インターネットの普及とともに組織形成された「仮想組織」である。課題型コミュニティと似通った部分があるが、情報のやりとりのみの範囲なので幅広い地域の人と関係を結ぶことができ、その情報量もかなり多い。しかし匿名性があるた

め、意見をいいやすい一方、傷つけやすく人間関係を構築することに対しては、不安定さがあるとされている。こうした類型に沿って考えると、山間部に息づくコミュニティでは、地域型コミュニティの良い面ばかりでなく、地域の住民との関係性を保つための付き合い方があると考えられる。それは、主介護者のインタビューの中にも表れている。表4では「近所に99歳のおじさんが住んでおられるが、あまり交流がない。」「健康を案じる会話が家族同士で行われる付き合いである」にあるように、近隣住民が具体的な援助を行っているのではない。言語的な励ましと気遣いによる付き合い方である。こうした家の問題は、近隣住民にとっては、踏み込んではいけないマナーとして息づいているようであった。さらに表5の中では、主介護者は「山間部の人付き合いは、海浜部の人付き合いよりも温かい」と感じており、「介護していることを励ましてくれる近所付き合いがある」、「ただ『大変やな』という優しい気心を持った声をかけてくれることが励ましになっている」、「地域から認めてもらっていることが助かっている」ことに表されるように、主介護者にとって精神的な支えになっている。また「お土産や珍しい物があれば近所へ持っていくことは度々ある」が、介護を頼むことは、主介護者にとっては言えない状況にある。それは「忙しい時に、『おばあちゃん見てて』とは言いにくい。…（中略）近所の人に迷惑をかけるのは困る。地域との関係を壊すことは考えられない」に表されている。このことは即ち、主介護者にとって介護は“大変なこと”、“近所への迷惑”と考えられており、近所付き合いに影響を及ぼす要因として認識されているようである。また主介護者が百寿者をこの地域で介護するとき、近所の人とかかわる上での気遣いについて、「近所付き合いの関係がこじれるということはない。」と断言され、「それぞれが辛抱しているのだと思う。喧嘩は考えられない。嫌なことがあっても口には出さないようにして、関係を保っている。」と語った。このようなことから山間部での生活は、地域の住民との関係を壊さないことが一番に考えられていた。そのため主介護者は、表5の中で「デイサービスは1回/週、ショートステイは、主介護者の予定があるときに2泊3日で利用する」と語っており、計画的に公的介護保険制度を利用していた。さらに「うまいこと、そういう公共的なのをね(活用している)」と語っている。これは、自宅で百寿者の介護を行っていても、近所との付き合いをうまく保つことや、円滑な人間関係を維持すること、百寿者が生活機能能力を維持して



いること、自分の趣味の時間も持つこと、公的介護保険サービスを計画的な利用するなど、すべてのバランスが調和していることに対する満足感のように感じられた。

### 3. 主介護者が地域住民から受ける情緒的な励ましの効果

ここまで、山間部という地域性の中での介護の特徴を考察した。次に、百寿者を介護する主介護者の介護に対する思いについて検討する。表5において主介護者は、百寿者を介護する上で、地域の力によって助けられていることは、言語的な励まし以外に「何もない」と話した。また「地域の人と介護をしているのではない」と断言しており、あくまでも介護は、家の課題であるという印象を受けた。

表6では、主介護者は、百寿者となった姑に対して、12年間の介護生活を振り返り「『手塩にかけて』介護してきた。」と語っている。その印象は、とても貴重なこと、とても大切にされてきたことの毎日だったことがうかがわれた。介護者は女性が多く、要介護者との続柄が「子の配偶者」や「配偶者」の割合が特に高く、所謂「嫁」や「妻」が主に介護を担っている現状がある<sup>16)</sup>。主介護者であるBさんも嫁と姑という関係性であるが、介護に対しては、役割意識が根深い。それは表6主介護者が認識している百寿者介護に対する思いと介護を支えるものに表されている。「面倒を見るのは当たり前」という意識である。しかし食事や排泄の介助には、一筋縄ではいかない苦労がある上に、配偶者が非協力的であれば、ストレスフルな状況であることは一層のことと察する。だが表6において主介護者が「介護上の修養」と認識している内容をみると、上手にストレスを回避させていることがわかる。その方法は「腹を立てるのではなく、(その気持ちを)無視することが大事」、「ご飯をこぼしても、こぼすものだと思って、見て見ぬ振りをするのが大事」、「怒っても仕方ない。開き直りが大切」に表されている。そのためは、「趣味や友人を多く持ち、自らの健康を維持し、交流の場を求めて出向くことが秘訣である」と断言された。また、主介護者の子供や孫に、介護を行う姿を見せることが、祖母として継承する教育の一環であると認識していた。このことは一方で、やりがいにつながる行為として、主介護者が百寿者を介護する支えとなっていると思われる。主介護者にとって情緒的な励ましになっているものには、地域の住民の声掛けがあった。また2009年財団法人「淡路信用積善会」

が、長年にわたって家庭で介護にあたっている介護者20人を表彰しており、Bさんも称えられている。このように百寿者を介護する上で情緒的な励ましが得られることは、介護に対する考え方をポジティブな方向へ導く要素であると考えられた。

### VI. 研究の限界と課題

本研究は、対象者が1事例であったことにより、事例研究となった。データを一般化するには限界があるため、今後はさらに対象者を増やして検討する必要がある。また百寿者へのインタビューにおいては、ADLを配慮した聞き方を考慮する必要があった。

### VII. 結論

淡路島の山間部の地域性が百寿者と主介護者にどのように影響しているかについて明らかにすることを目的に、半構造的インタビューを行った結果、以下の点が明らかになった。

1. 淡路市の山間部は、住民自治が残っている。地域がつくられるきっかけ毎に分類された類型は「エリア型地域活動によるつながり」に相当し、住民自治の状況変化から分類された類型は「地域型コミュニティ(ゾーン型)」であった。このような環境の中、主介護者は、その地域の絆については「結構強いと思う」が、百寿者の面倒を見てもらうことは「迷惑をかけてはいけない」という思いが大きいため、実行していなかった。つまり地域力は集落の安泰を維持するために、防災時には協力体制として発揮するが、介護など家々の問題は、地域の問題とは別として認識されていることがわかった。
2. 山間部の自宅で介護している主介護者は、地域住民から情緒的な励ましを受けており、このことが介護に対してポジティブな姿勢を生んでいた。
3. 介護上の不自由さは、地域力に頼らず、公的保険サービスを活用して満足していた。
4. 百寿者を介護する生活は、「手塩にかけてここまで来た」という満足感に値していた。

以上より、山間部の自宅で生活する百寿者と主介護者に対する支援は、実質的な支援を地域力に委ねるのではなく、公的保険サービスが順調に受けられるようサポートすることが重要であり、情緒的な励ましを主介護者に送り続けることが必要であることが示唆された。

参考文献・引用文献

- 1) 厚生労働省「百歳高齢者に対する祝状及び記念品の贈呈について」,平成23年9月13日版
- 2) 前田清他:高齢者のQOLに対する身体生活習慣の影響,日本公衆衛生雑誌,8(5),pp497-506,2002.
- 3) 齋藤功他:健康関連QOLの向上を目指した健康づくりの展開,厚生の指標,51(7),pp22-27,2004.
- 4) 大森純子:前期高齢女性の近隣他者との交流関係と健康関連QOLとの関連,日本公衆衛生雑誌,54(9),pp605-613,2007.
- 5) 塚本恵他:沖縄における住宅百歳老人の生活と介護に関する研究—生活自立例と寝たきり例の比較—,沖縄県立看護大学紀要第2号,pp9-17,2001.
- 6) 神戸新聞淡路総局 福岡宏一,淡路の20世紀—その光と影,神戸新聞総合出版センター,p157,2001
- 7) [http://www.hyogo-c.ed.jp/~maiko-hs/memorial/2003/m2003\\_03-10.htm](http://www.hyogo-c.ed.jp/~maiko-hs/memorial/2003/m2003_03-10.htm)
- 8) <http://www.shinsaihatsum.com/column/19960527awaji.html>
- 9) 淡路島における百歳高齢者の生活実態,山口県立大学学術情報 第5号 [大学院論集 通巻第13号],2012.
- 10) 野口定久:新時代の福祉を学ぶ(株)みらい,p43
- 11) 同掲書,p43
- 12) 同掲書,p43
- 13) 内閣府 平成19年度版 国民生活白書,p101
- 14) 淡路市地域福祉計画 平成19年3月 淡路市 資料p72
- 15) 同掲書p73
- 16) 野口定久:新時代の福祉を学ぶ(株)みらい,p27

参考資料

1. 山間部の風景



2. 民家に続く山道①



3. 民家に続く山道②



